

厚生労働科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業）  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

小学生を対象とした「カルテット」教材利用可能性の検討

研究分担者 堀口逸子 順天堂大学医学部  
研究協力機関 三重県

**研究要旨：** 人獣共通感染症に対する情報提供として、狂犬病をテーマとした「わんわんカルテット」の集団対象の利用可能性について検討した。調査は小学4年生70名を対象として実施した。小学生の授業において指導要綱を作成しプレイの前後に10問のクイズを質問紙として配布し、知識習得状況について評価した。その結果、すべての質問について第2回目の正答率が上昇し、プレイにより知識が習得できていることがわかった。今後はイベントなどでの利用可能性が示唆された。

#### A. 研究目的

人獣共通感染症に対する情報提供として、その専門家である獣医師が住民に周知すべき人獣共通感染症として最も重要視しているのは「狂犬病」であった<sup>1)</sup>。

一方、狂犬病に関する情報提供媒体として、ゲーミングシミュレーションを利用し、欧米で古くから利用されているカルテットゲームによる「わんわんカルテット」を開発した<sup>2)</sup>。

「わんわんカルテット」の主として家庭での利用可能性について過去研究報告を行った。

一方、動物愛護教室など保健所などが小学校で実施している出前教室がある。

学校やイベントで、集団を対象としての利用可能性について検討を行うことを目的とした。

#### B. 研究方法

2011年9月から三重県内1小学校4年生児童2クラス70名を対象として実施された動物愛護教室の一部として実施した。動物愛護教室は、県の動物愛護センター職員による出前授業である。

実施にあたり職員が利用する45分授業用指導要綱を作成した（資料参照）。ゲーム内容に関する10問を設定し、児童にはクイズと説明後、○か×で回答してもらった。成績などには無関係であることを口頭説明と質問用紙に記述している。

##### 【質問文一覧】

- (1) 犬は15年くらい、長生きします。
- (2) 犬をかったら、お役所にとどけなければなりません。
- (3) 犬は、毎年1回、ちゅうしゃをします。
- (4) 犬には、よんだらくるようにしつけをします。

(5) 犬が、病気で熱があるかどうか、鼻でわかります。

(6) 犬のおなかのなかに、虫(むし)がいることがあります。

(7) 犬(いぬ)をさわったあとはせっけんで手(て)をあらいます。

(8) 犬(いぬ)とキスをすると、びょうきがうつることがあります。

(9) きょうけんがひとやどうぶつにうつると、100%死にます。

(10) もうどうけんは、目のふじゆうなひとをゆうどうします

質問文はすべて読み上げ、回答が終了後、質問用紙を回収し、ゲームの配布とルールの説明を行い、グループ単位でプレイを開始してもらった。プレイが終了し次第、自分が獲得したカードを読み聞かせするようにした。すべてのグループが読み聞かせが終わった時点で、カードを回収し、再度質問用紙を配布し、回答してもらった。質問は読み上げ、回答終了後回収し、正答が記載された質問用紙を配布した。

#### D. 結果と考察

各問の正答率を見ると、第1回調査では、14.3% (2) から 94.3% (7) であった。第2回調査では、82.9% (5) から 100% (10) であった。すべての質問において正答率は上昇した。第2回調査 100%の正答率となったのは、3問あった。

犬に関する内容として、届出や病状、感染、狂犬病に関する情報を得ておらず、顕著に情報を獲得していた。

カルテットは授業で利用可能であり、専門家が必ずしも必要ではない。また、プレイにより情報が得られることが確認できた。

児童は休み時間に特に悪天候などで屋外で遊ぶことができない場合など、繰り返しの利用も考えられる。

今後の展開として、保健所主催の動物取扱業者対象研修で利用しており、コミュニケーションの道具としての利用可能性が考えられた。また、全国ショッピングセンター子ども預かり施設(66カ所)での利用のための職員研修において実施しており、楽しみながら学ぶ機会が増加すると考えられる。また、授業での利用可能性が示唆されたことは、イベントでの利用可能性が高いことが考えられた。全国ショッピングセンター内ペットショップイベントにて利用の検討を開始している。

謝辞：調査にご協力いただきました方々に厚くお礼を申し上げます。

#### E. 結論

集団において利用可能であることが示唆された。

引用文献：

1) 堀口逸子, 石川直子, 馮巧蓮, 城川美佳, 丸井英二 一般住民への普及啓発が必要な動物由来感染症は何か 獣医師を対象とした質的調査日本衛生学雑誌 66 巻 4 号 P741-745 (2011)

2) (財) 日本公衆衛生協会  
[http://www.jpha.or.jp/sub/menu05\\_2.htm](http://www.jpha.or.jp/sub/menu05_2.htm)

1

#### F. 研究発表

1. 論文発表  
なし



厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

### 感染症発生動向と新聞記事の関連性に関する研究

研究協力者 久我大雅 順天堂大学医学部  
研究分担者 堀口逸子 順天堂大学医学部

#### 研究要旨

感染症の発生動向とメディア報道の実態の関連性について、新聞記事を利用した分析を行った。メディア報道として日経テレコンから読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞朝刊及び夕刊を検索した。検索キーワードは「感染症」「肺炎」「破傷風」「食中毒」で検索期間は2011年3月11日から2011年8月31日までの期間である。実際の事例報道よりは、感染症発生予防を視点においた注意喚起の記事が多いことが推察されたが、今後は、恐怖感を惹起するような表現かどうかなどの記事内容分析が必要と考えられた。

#### A. はじめに

震災後の感染症の流行について、インドネシアやハイチの地震などの報道が国内においてもあった。

今回の東日本大震災における感染症のメディア報道の実態について、現状を踏まえ新聞記事の分析を行った。

#### B. 研究方法

感染症発生動向に関して、国立感染症情報センターホームページの感染症発生動向調査のうち、震災に関連したと考えられる届出症例を利用した。

メディア報道として日経テレコンから読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、産経新聞朝刊及び夕刊を検索した。検索キーワードは「感染症」「肺炎」「破傷風」「食中毒」である。検索期間は2011年3月11日から2011年8月31日までの期間である。

検索キーワードから見出しを確認し、東

日本大震災に関連すると考えられた記事を抽出した。

#### C. 研究結果及び考察

食中毒は、富山県における「ユッケ」による死亡事故が発生した時期と重なっており、その関連報道がほとんどであった。

「感染症」のキーワードでは、総文字数を見ると3月13日以降4月下旬までが多くなっている。また、紙面では、20頁台が多く、社会面ではなく注意喚起を促すものがほとんどであった。発生事例としては、「郡山市避難所におけるノロウイルス検出。60名が発症」(2011/4/11朝日新聞)、「一関でノロ集団感染」(2011/5/17読売新聞)「会津若松で19人食中毒」(2011/5/17毎日新聞)、「福島避難所で69人食中毒」(2011/6/15産経新聞)があった。

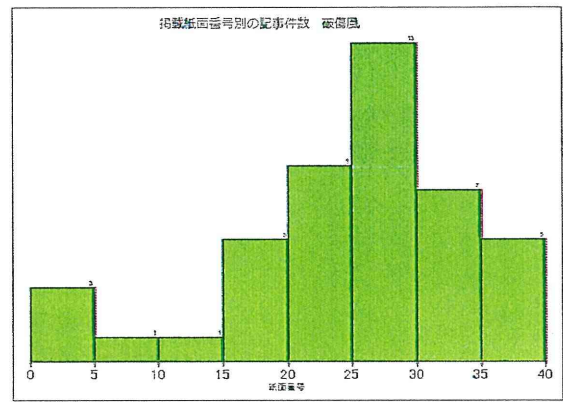
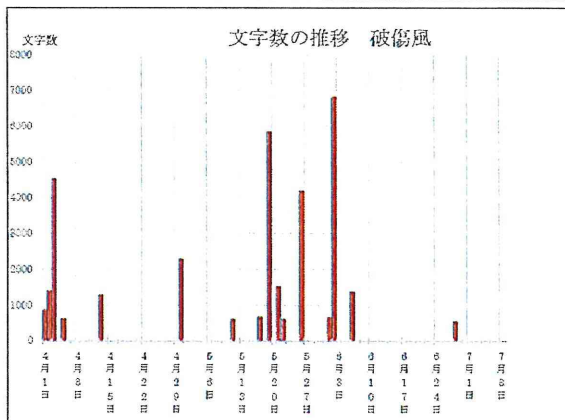
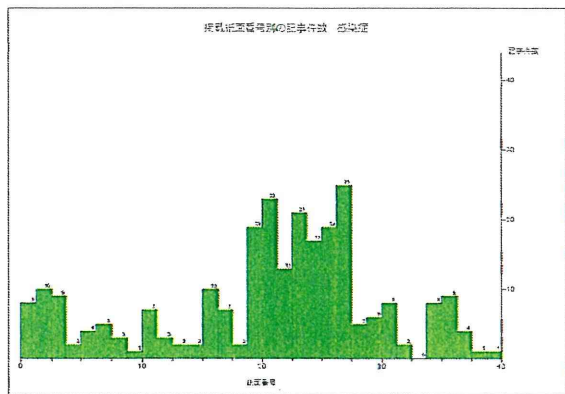
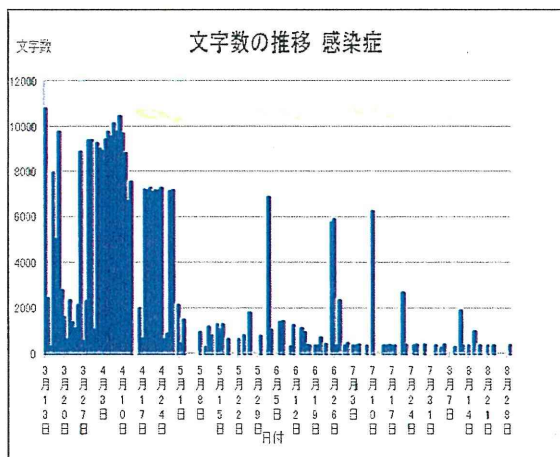
「破傷風」に関して発症は9例であり、震災当日に受傷した被災者であった。しかし、記事としては、4月1日以降に見られ、

救援・ボランティア従事者等の発症を危惧し、ワクチン接種等が呼びかけられており、紙面としては社会面中心ではなかった。

#### D. 今後の課題と展望

感染症の事例に対して、事件としての取り扱いではなく注意喚起として記事となっていたことは、震災以降の発症の抑制に働いた可能性がある。

一方で、むやみに感染症の流行への恐怖を煽ることになっていないか、表現方法など記事内容の分析が必要と思われた。



E.

#### 参考文献

なし

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表・学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

Webを利用した国民の感染症に対するリスク認知に関する研究

研究協力者 河邊千佳 順天堂大学医学部  
研究分担者 堀口逸子 順天堂大学医学部

研究要旨

リスク認知状況を継続的に把握することは、効果的なリスクコミュニケーションのために重要かつ必要なことである。今回、約全国 1000 人を対象とした Web 調査を利用し、現状を把握した。調査時期は 2011 年 9 月である。各感染症の項目では、「狂犬病」「エボラ出血熱」に対する危険は「危険がある」とした者は約 50%で低く、「新型インフルエンザ」が最も高く約 80%であった。今後は、男女や地域による分析をすすめ、過去の報告と比較検討の必要があると思われた。

A. はじめに

リスク認知状況を継続的に把握することは、効果的なリスクコミュニケーションのために重要かつ必要なことである。感染症のリスクに対する国民の意識に関して、個々の感染症の状況について把握することを目的とした。

B. 研究方法

平成 23 年 9 月の震災より半年後、goo リサーチモニター（消費者パネル）63 万人のうち、20 歳台から 60 歳台までの約 1000 名の回収を見込み、抽出依頼をした。調査地域は全国 47 都道府県である。

C. 研究結果及び考察

対象者は 1054 名で、男性 527 名、女性 527 名であった。平均年齢は 39.7 (±10.8 SD) 歳、男性 39.9 (±11.0 SD) 歳、女性 39.4 (±10.7 SD) 歳で、性別による有意差はなかった (P=0.45)。

「自分にとってどの程度危険があるか」の問に対して、「危険がある」「どちらかといえば危険が

ある」との回答は、「鳥インフルエンザ」61.8%、「SARS」59.2%、「BSE」53.2%、「炭疽菌」43.8%、「肝炎」59.2%、「結核」56.6%、「HIV/AIDS」58.7%、「狂犬病」49.0%、「ノロウイルス」70.3%、「新型インフルエンザ」78.3%、「O157」74.8%、「エボラ出血熱」49.9%であった。

「感染症で死に至る」は自分が自身に「起こりそうだ」3.3%「どちらかといえば起こりそうだ」13.3%で「わからない」44.7%が最も多かった。「バイオテロの被害者になる」では、「起こりそうだ」2.1%「どちらかといえば起こりそうだ」7.9%で「わからない」41.8%が最も多かった。

リスク認知の構造として、「大気中の発がん性物質」「電磁波」「受動喫煙」「遺伝子組み換え食品」「魚介類に含まれる水銀」「放射能」「残留農薬」「食品添加物」の 20 項目で、「危険でない」から「危険である」の 5 件法で選択させた。また、1 項目でも「わからない」「そのことばを知らない」に回答した者を除いた 748 名を対象とした。対象者全体で、主因司法の因子抽出法およびプロ

マックス回転法で分析したところ、3 因子が抽出された。第1 因子として因子負荷量の高い項目は、「炭疽菌」「エボラ出血熱」「SARS」「狂犬病」「BSE」「HIV/AIDS」「鳥インフルエンザ」「肝炎」「結核」であった。第2 因子は、「遺伝子組み換え食品」「食品添加物」「電磁波」「残留農薬」「魚介類に含まれる水銀」「受動喫煙」「大気中の発がん性物質」「放射能」であった。第3 因子は、「ノロウイルス」「新型インフルエンザ」「O157」であった。

また、男性（413 名）と女性（335 名）に同様の方法で因子分析したところ、全体と同じ3 因子が抽出され、第1 因子、第2 因子、第3 因子で因子負荷量の高い項目も同じであった。

今後は、男女や地域による分析をすすめ、過去の報告と比較検討の必要があると思われる。

#### D. 今後の課題と展望

継続的に把握し、国内外における感染症発生動向などを参考に、リスク認知状況にあった情報提供が期待される。

#### E. 参考文献

なし

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表・学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

|            | 因子    |       |       |
|------------|-------|-------|-------|
|            | 1     | 2     | 3     |
| 炭疽菌        | 1.075 | -.066 | -.155 |
| エボラ出血熱     | .979  | .037  | -.182 |
| SARS       | .906  | -.093 | .056  |
| 狂犬病        | .836  | .009  | .015  |
| BSE 狂牛病    | .778  | .090  | .004  |
| HIVAIDS    | .766  | .010  | .096  |
| 鳥インフルエンザ   | .733  | -.044 | .117  |
| 肝炎         | .653  | -.009 | .234  |
| 結核         | .517  | .053  | .335  |
| 遺伝子組み換え食品  | -.050 | .915  | -.088 |
| 食品添加物      | -.199 | .914  | .057  |
| 電磁波        | -.074 | .840  | .033  |
| 残留農薬       | .093  | .762  | .030  |
| 魚介類に含まれる水銀 | .258  | .651  | -.049 |
| 受動喫煙       | -.017 | .594  | .124  |
| 大気中の発がん性物質 | .335  | .557  | .019  |
| 放射能        | .372  | .546  | -.032 |
| ノロウイルス     | -.075 | .021  | .948  |
| 新型インフルエンザ  | -.011 | .026  | .842  |
| 0157       | .264  | .050  | .607  |

因子抽出法：主因子法

回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

a. 6 回の反復で回転が収束しました。



平成 23 年度厚生労働科学研究費補助金

情報弱者への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究

研究者名簿（五十音順）

研究代表者

丸井 英二（順天堂大学医学部公衆衛生学教室）

研究分担者

金田 英子（東洋大学法学部健）

城川 美佳（富山大学専門医養成支援センター）

吉川 肇子（慶應義塾大学商学部社会心理学組織心理学）

重松 美加（国立感染症研究所感染症情報センター）

杉浦 淳吉（愛知教育大学教育学部家政教育講座）

高木 彩（千葉工業大学社会システム科学部金融・経営リスク科学科・社会心理学）

竹中 伸一（財団法人結核予防会結核研究所国際協力部）

早坂 信哉（順天堂大学医学部公衆衛生学教室）

濱田 篤郎（東京医科大学病院渡航者医療センター）

福島 慎二（東京医科大学感染制御部）

堀口 逸子（順天堂大学医学部公衆衛生学教室）

山崎 瑞紀（東京都市大学環境情報学部社会心理学）

研究協力者・機関

河邊 千佳（順天堂大学医学部麻酔科学教室）

久我 大雅（順天堂大学医学部）

三重県

KOKUYO 特-50M